

MOMO 企画の「ファンタジーと現実の関係を考える」として以下の文章を掲載します。ご意見を頂ければ幸いです。4つ目の考察です。

MOMO 企画の「ファンタジーと現実の関係を考える」 4

——ファンタジーと共同の幻想——

共同の意思とは心の理論を背景にした共同幻想か？

私の大いなる誤解でないことを祈りつつ……

発達クリニックばすてる 院長 東條恵

2021年3月27日

はじめに

50年近く昔、「共同幻想論」という本を購入して読もうとした日々がありました。そのネーミングに引かれたことと、時代の流行りとして、取り上げられた本だったからでしょう。

2020年7月に、本書を取り上げた、「100分で名著」番組（NHK）を視聴しました。以前は、理解できず、何を問題にしているか分からなかった印象の本でしたが、今回、著者の問題意識、著者の思考の大筋・枠組を、解説者からの説明（口頭や文章）を通して、若干触れることができました。

吉本氏の問題意識の一つは、「人は何をもって他者やある観念を信じられるのか」、「何をもって、自分とは異なる他者と繋がろうとするか」であると、おぼろげに理解しました。国家は「共同幻想」としてあり、その下？に男女間なりの「対幻想」があり、そして「個人幻想」があるという論点と理解しました。今回のこの3つの段階という論点は今回はずし、「幻想」について考えてみます。

「幻想」とは何か？

この意識は、私の最近の問題意識、心の理論への興味と重なりました。「人は心の理論システムを使って、人と感情や考えを共有しようとする、それも自動的にいきなり、時にこのシステムのスイッチを切ることで、他人からの影響を受けないようにしている」と理解しています（日常生活では家族や他人を愛し、他者と闘う場面では非情になるなどはその例なわけです）。一方、「心の理論のメタ認知システムがないと、他者を信じることができなくなる、自分の精神のバランスを保つことができなくなる」と理解・推測できます。

「他者を信じる」ということでは、心の理論以外の論点があるとは思いますが、今の私にはわからず、論点が出て来ません。ともかくも、他者を信じるに当たり、脳システムと

して、心の理論が大きいことはわかります。この「心の理論と「幻想」のイメージはかなり重なっているのではないか」というのが、本メモ・論考の主旨です。

おそらく、個人幻想、対幻想、共同幻想における「幻想」とは、脳内にあるミラーニューロンを背景にし、直感を通したり言葉による学習を通して他者の心を読む作業をしているといわれる人間の社会における話だと思われまふ。社会としての合意形成に至る基礎である「心の理論」の動きがあつてこそ、社会・国家というまとまりが成立するという話だと思ひます。この「幻想」とは、「心の理論」抜きで理解できる話とは、私には思へません。最近日本政治の中ではやつた言葉としての「忖度」は、心の理論の話しであるわけで、「忖度による政治」なりが成立するのは、互いに心の理論を使つている人同士ならではでしよう。

個々人の心の理論＝メタ認知内容が、それなりに似通つてゐるであるが故に、個々人の考えは、その社会のスタンダード＝共通の意思＝共同の幻想になるのではないでしようか。

吉本氏の生きた時代、吉本氏の考え

吉本氏は、どう納得したのでせう。本書を書いた1968年には、心の理論という観点は全世界的に知られていないと思ひます。心の理論は1975年あたりから問題にされてきたからです。吉本氏は、人と人との間にある現象を観察し、個人幻想、対幻想、共同幻想と積み上げて、多数派社会としての成り立ちを理解しようとしたのではないでしようか。その社会に貫く共通する考え方や感情＝共同「幻想」がどのようにして生まれるかを問題にしたのだと思ひます。それが、例えば軍国主義教育から民主教育へなど、戦前戦後であまりにも価値観が揺れ動いた中で、その時代を経験した吉本氏にとっては人の考え方の変節、まずは理解不能の現象として映つたのかもしれない。一方人の感情・考えは変わるこゝが現実だつたわけで、中を貫く原理を吉本氏は考えたかつたのでせう。「何故人は変れるのか」という問題意識はあつたことではしう。

「個人幻想」とはその人の他者の心の読み方であり、忖度の仕方・内容であり、それより広がりがあるのが、男女ないし、人と人との1対1の「対幻想」となるのでせう。人は他者の気持ちを読み、それを他者と確認し合うことにより、その思ひを強くなる・確認する、はずですから。恋愛関係が一番理解しやすいでしよう。政治集団や宗教集団もそうではしう。家族という集団もそうではしう。そして人間集団からなる地域社会や国家というまとまりにおける意識的なもの＝「共同幻想」へと広がるのでせう。そうすることを通して、自分というアイデンティティをその中に安定させて位置づけようとしてゐるように見えます。

共同幻想にすぎること、生命体として生きる上で、自分自身の納得を作る上で、吉本氏にとってだけでなく、私にとつても必然的な作業に思ひます。多くの人にとっては、心の理論を土台として、「考えるというよりも感覚的に行つてゐる納得作業」と推測します。

目に見えないもの（感情・考え）で人と繋がっている、それは何故なのか、時代によって条件によってがらりと変わる感情・考えの中で、「自分とは何なのだろう」「自分の考えとは何なのだろう」「何故一貫しなくても生きることができるのだ」「人はどのように納得するのだ」「変更・変節・転向は変だ。人としておかしいのでは…いやまてよ・・・」という問題意識が吉本氏に強くあったのでしょうか。

私の印象

しかし、人とは状況に合わせて生きようとする生き物という面を持ちます。「存在は意識を規定する」通りに、経済的状況、政治支配体制の変化に伴い、生きる上での考えを変える、ないしは影響を受けるのが多数の人の通常でありましょう。そこを一貫させるべきという姿勢は「あり」ですが、多くの人々の姿ではないようです。何らかの折り合いをつけるのが、多くの人でしょう（一部の人は自分を貫こうとする中で、苦しい生き方になると想像できます）。

吉本氏は、自分という生命体を巡っての生存条件を探る作業を考えているというより、自分という意識・考えを持つ一貫性ある哲学者としての人間の一貫した生き方を考えている、と感じます。動物としては、「自分の意思を曲げてでも、何としてでも生き残る」ことはあるわけですが、それは人間の理念としては一貫性のない事であり、人を信じられなくなるはずと、吉本氏は言うのかもしれませんが（軍国青年が戦後に民主主義的人間像へ変節することが多くあったわけで、何故人はそのように変化できるのだという疑問はなかなか払拭できなかったことは想像できる範囲です。ごまかしているはず、新たな社会に適応し生きるには何らかの考え方・理念の変更が必要との理屈を考えそう信じるだろうからです）。

しかし、人間は動物であり、思索はするが生き抜いていく方向を選ぶのがより自然とも言え、生存条件が変われば、考え・感情を変えるのが自然と言えます。「存在は意識を規定する」というマルクスの論理は納得できます。「良い悪い」といった話ではないと感じます。特に経済的状況に人の感覚・感性は支配され易いと思います。この表現は、余りに現実を肯定しすぎる態度、人といった悩める姿を示す存在をつまらなくする論点かなど、自分でも感じます。私は、吉本氏の様な、戦前・戦後の落差を実体験として感じたことがない気がするので、その落差を問題にすること自体が分かっていないかもしれません。

こころの動きー「幻想」と呼ぶか、「心の理論」と呼ぶかの違い？

脳内にあるミラーニューロンは、視覚情報を入力すると、運動システムが動くという、視覚＝運動となっている仕組みと言われます。他者の動き、他者の思い・感情を、別の個体である自分であっても、感じる事ができる、近似・類似体験ができるというわけです。その人がしている、最後には心が動いている経験を、自らのシステムを使って追体験することが可能になるわけです。その人が暴漢に襲われている時に、自分も襲われているかの如くに、恐怖を感じるのです。もっとも自分に引き起こされた感情の原型は、脳内ミラー

ニューロンを使ってそれまでに学習した感情の中から脳というコンピューターが自動的に検索して見つけ出した結果でしょう。頭の中では、他者の感情を推測する作業をする癖と
いうか、生存条件をおそらく求めて、自動的にこれをしてしまうようです。

人は心の理論が動く中で、互いに影響しあって、互いが納得する形での了解へ結論付ける癖があるようです。これは、集団として生き残るための知恵ではないでしょうか。他者を認め、自分も認めてもらいたいからでもありましょう。自分が被捕食者であった大古の昔から DNA に刻み込まれたシステム、おびえつつ生き残ろうとする立場といえるでしょう。しかし集団の意思が間違った方向であれば、自分の命を危険にさらすこともあるわけです（例：集団対集団の闘いを肯定し、その中で命を落とすことをよしとするとか）。これは、生命体としては不合理ですが、集団の中で生きようとする、こうなるのでしょう。ここでは他者と自分を結びつける「幻想」が生まれているでしょう。最近政治の世界で浮上した「付度」という言葉も同様な内容を含んでいるわけです。「人への思いやり」もそうでしょう。「集団間の利害を調整する」こともそうなのでしょう。

私達生命体は、集団でないと生きることができないことを、狩猟時代そして農耕時代を含め大古の昔から知っており、集団として生きようしたり、それしか生き残る道はないと直感的に感じたり、理屈や感覚で認識し選択してきたのでしょう。そこでは、集団を優先し、個人を否定することも出てくるわけです（個人的には戦争は嫌だが、集団を守るために戦争へ行くという考え方を採用した戦時中の人々は、そういう心の動きなのではないかとも思ってみるのです。実体験はないのですが・・・）。

最後に

心の理論は、自分の足かせにもなります。自分の思いに基づいて自由に羽ばたくことを妨げます。人はこのことを知りつつも、感じつつも、多くの場合に集団に合わせようとします。自分の感情・考えを押し殺すことに納得する場合も多いのです。これが生きやすいし、当面の利益とを感じるからでしょう。軍国主義や全体主義ファシズムを多くの人が受け入れた現代史の日本の過去は、その例ではないでしょうか。

人は心の理論システムを使って、他者の気持ちを読み、他者の気持ちと自分の気持ちをすりあわせつつ、相手と自分を尊重するために（互いをつぶさないために、両者が共存するために）、お互いが妥協をする作業ということをしているように思います。

心の理論は、これがあって初めて多数決の原理も成立するでしょうし、社会におけるルール作りも成立するでしょう。一方、自分を丸め込むシステム、妥協をするためのシステムとも言えます。興味深いです。このような人間的な脳活動は、ファンタジーとでもいうべき世界、想像力を駆使した世界を形成しています。「脳システムによる想像の世界はファンタジーであり幻想である」とも言えます。私たちは同じような夢を見る動物、同じような方向性を考えられる動物なのでしょう。

そしてこの後には、「では心の理論が不調な場合に共通の意思、共同幻想的世界の形成は

どうなるのか？」が出てきますが、これは別途に考えようと思います。

以上メモ程度ですが、自分の思索を言葉であらわして、整理しようと思いました。まだ、上手くまとめることができていないことを自覚していますが・・・。

以上。